

「古くて新しい福音」 (ルカ五章二七〜二九節)

1 レビ

先週から再びガリラヤのイエスの宣教活動を取り上げています。今日の箇所は一人の徴税人がイエスの弟子として招かれたことと、宴会の席でのイエスの教えと、この二つからなっています。聖書の見出しも二つあるので、別々の話のようですが、そうではなく、一続きのものであります。少し長いかも知れませんが、全体を一緒に読んでみたいと思います。

そののち、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った(二七〜二八節)

イエスの十二人の弟子、その全員の名前は、次章、六章に出ています。そこにマタイ(一五節)という名前があります。彼がレビです。レビはマタイによる福音書を書いたマタイと同一人物と見なされています。

弟子たちがどのようにして弟子となったか、イエスとの出会いや招き、その消息が詳しく書いてあるのは、十二人の中でペトロら四人の漁師たち(五・一〜一一)のほかは、このレビ、すなわち、マタイだけです。

もちろん弟子たちにはみな、それぞれ、その特別の招きの出来事があつて、彼らはそれを自分の人生の原点として大切にしていたはずです。ただそれも書いていたら福音書には収まりきれなかったでしょう。

しかしその上でなおレビが取り上げられたということ、そこには理由があつたように思います。それは彼が徴税人であつたということです。それが取り上げられた一番の大きな理由です。イエスとはだれか、どのような方か、それを知るために・伝えるために、レビのことも語られなければならないのです。

徴税人というのは、ローマ総督の管轄下で集められていた関税とか通行税とかの間接税の徴収を請け負っていたユダヤ人です。彼らの多くが、納めるべき額以上のものを取り、上前をはねて、私腹をこやしていました。金持ちが多かつたのです。ですから民衆にとつては、ローマによる支配の手先として、汚れた背教者、「罪人」(三二節)と見なされてきました。

彼らが実際社会でどのような立場にあつたのか、どのように見られていたか、扱われていたかは、例えば、私どももよく知っている徴税人ザアカイのことを思い起こせば分かります(一九・一〜一〇)。

エリコの町、評判のイエスが来るというので、ザアカイも通りに出て一目見ようとしたします。背が低かつたので列の前に出ようとしたザアカイ、しかしだれも彼を入れて上げようとはしません。「群衆に遮られ」て、近くの木に登って、そこに隠れて見ていたのです。そこをイエスに見えられたわけです。彼は、徴税人というその職業のゆえに「アブラハムの子」、すなわち、正統なイスラエル人とは見なされず、社会的な交わりから、それゆえ宗教的交わりからも外され、イエスを見ようとしても邪魔

されたのです。

レビも同じ徴税人です。ただザアカイの明るい性格と違って少し内向的な感じを受けます。決めつけてはいけません、私にそういう感じをいだかせるのは収税所に「座っていた」という言葉です。役所に座って仕事をしているのは、ある意味で当然ですけれど、徴税人として、ふだんから罪人として見られ、扱われ、ずっと気持ちを抑圧されていたのではないか。例えばザアカイのように、イエスを彼も見に行きたかったかも知れません。イエスが来たと聞いて走り出したかったかも知れません。しかし彼は「座っていた」、立ち上がることをしなかった。この「座っていた」、私には気になる言葉です。

招きを受けすぐに何もかも捨てて立ち上がったレビの姿に、その苦悩の深かったことを、見て取ることができるかも知れません。彼は解放の喜びを爆発させます。その喜びは大きな饗宴の催しとなります。何もかも捨てたのに、その後大宴会を開いたのは、何か矛盾するという学者もいるようですが、おそらく矛盾はしない、盛大な宴会は、大きな喜びの証しなのです。

2 食卓の主イエス

弟子となって、レビが最初にしたことが、いまま少し申し上げたように、喜びを、人生の方向づけを新たにされた喜びを、徴税人の仲間者たちに、それだけでなくもっと多くの人にすぐにでも証しすることでした。新たな人生をもたらしてください方「イエスのために」盛大な宴会を催すことでした。イエスもまたこれを喜んで、その食卓の主となってくださったのです。

しかしイエスが食卓の主となっているのを、周りから冷ややかに眺め、「つぶやいた」人びともそこにいました。

ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか」。イエスはお答えになった。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」(三〇〜三二節)。

「ファリサイ派の人々やその派の律法学者たち」、彼らは、すでに前の箇所でも、イエスが中風の人をいやしたとき、いた人たちです。ここはガリラヤのカファルナウムです。イエスの動向を監視していたユダヤ教の指導者たちが都エルサレムからも来て見張っていたのです。

彼らは、「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか」と、ここはイエスに直接ではなく、イエスの弟子たちに、自信がなかったからでしょうか(？)、尋ねています。

ユダヤ人たちは他の民族の人と交際すること、訪ねたりすることを掟によって禁じられていました(使徒一〇・二八)。ユダヤ社会の内部でも徴税人や罪人などは食卓を囲むこともありませんでした(ルカ一五・二)。というのも彼らは、ザアカイが

そうであったように「アブラハムの子」(一九・九)、すなわち、救いの契約にあずかった真正のイスラエル人とは見なされていなかったからです。食卓を囲むこと、それは、今日の私どもにおいてそうであるように、イスラエルでも、心通わせる、真の交わりを意味していました。その交わりの外に置かれていたのです。

イエスが食卓の主となられるということは、どういうことででしょうか。それは食卓を囲む人びとが神との交わりを許されるということですから。そこに罪人が招かれるということは、神は彼ら罪人の神となってくださるということです。彼らは神なき者たちではなくなるのです。

しかしそのことは、招かれた彼らもまた「悔い改め」を求められているということです。

この悔い改めをレビは実行しました。それは、何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従うことでした。イエスに従い、自らの人生を新しく方向づけることでした。自分のための人生から、イエスのための人生へ、神のための人生へと転換していくということでした。レビは悔い改めてイエスに従って行きます。弟子とは、学ぶ者、習う者という意味ですが、同時に従う者でもあるのです。

イエスはここで改めてメシアとしての自らの使命を語っています。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と。医者を必要としない健康な人は、どこにいますか。正しい人、義人はどこにいますか。おそらくどこにもいない(ローマ三・一〇)。そうであればイエスの招きを必要としない人はどこにもいません。悔い改めなくいい人はどこにもいません。イエスはすべての人の救い主、したがって私の救い主です。

3 古くて新しい生き方

さてこの饗宴の席で「人々」(三三節)はイエスに質問し、イエスとの間でやりとりが始まります。

この「人々」とはファリサイ派の人なのか、必ずしもはっきりしません。実際彼らは宴会の席にはついていなかったはずだからです。しかし質問の内容は、明らかにイエスを非難しているものです。

人々はイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子たちは飲んだり食べたりしています」。そこで、イエスは言われた。「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる」(三三〜三五節)。

当時「施し」と「祈り」と「断食」(マタイ六章)の三つが、ユダヤ社会で、敬虔な者の為すべき善行として推奨されていました。しかしイエスよ、あなたのお弟子さん方は、ふだんから、飲んだり食べたりで、断食をしない、あなたもそれを認めている、不敬虔なことだということです。

食卓での楽しい交わりに水をさすような質問を人々はイエスにしたのです。座はし
らけたでしょう。イエスはこれまでも断食を断食のゆえに否定したことはありません
し、自らも行い、将来もありうると語っています。しかしいまは、救いと喜びの時で
す。丁度婚礼のときのように、どうして断食をしていられるでしょうか。質問者とイ
エスの答えと、必ずしもかみあっているわけではありません。救いがここに到来して
いる、イエスと共にいまここに神の国が来ている、その喜びと確信がイエスの言葉の
根底にあるのです。

イエスは、最後に、たとえをもって、イエスをキリストとして信じて生きる私ども
の在り方を語っています。

だれも新しい服から布切れを破り取って、古い服に継ぎを当てたりしない。そん
なことをすれば、新しい服も破れるし、新しい服から取った継ぎ切れも古いもの
には合わないだろう。また、だれも、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはし
ない。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は革袋を破って流れ出し、革袋もだ
めになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れねばならない。また、古いぶど
う酒を飲めば、だれも新しいものを欲しがらない。「古いものの方がよい」と言
うのである(三六〜三九節)。

ここには一般によく知られた聖句があります。ただよく考えると、簡単ではありま
せん。たとえと書いてあるので、ますます理解が難しく、解釈も分かれているよう
です。それを全部紹介することはできませんし、不必要なことです。次のように私は比
較的単純に理解しておきたいと思えます。

新しい服、あるいは新しいぶどう酒、これはイエスによってもたらされる福音を指
します。古い服、あるいは古いぶどう酒、これはファリサイ派やその律法学者たちに
よって代表される宗教が示す生き方です。ポイントは、これらを両立させることはで
きないということです。

あれか、これか、です。ファリサイ派やその律法学者たちは、ここで使われている
言葉を使えば、「正しい人」は救われる、義人、すなわち、律法を行う人は救われる
と主張し、旧約聖書をそのように理解します。しかしイエスは罪人をこそ救う神の恵
みと憐れみを語ります。この二つに妥協の余地はない。あつたら、イエスの十字架の
死もなかつたはずです。

最後の節(三九節)は、とくに解釈の分かれるところです。私がいま言っているよ
うに、イエスと共に到来した新しいものの、福音の側に立って理解すれば、「古いもの
の方がよい」(知恵の書九・一〇)というのは、反対のことを言っていることになり
ます。そうではなくこの節は古いものに執着していることを厳しく批判している言葉
と理解しておきます(カルヴァン)。イエスのもたらした新しい福音、これは旧約の
本来の使信でもあるのです。万人に対する神の憐れみです。それならこの福音は古く
てかつ新しいものです。この福音に、神の恵みと憐れに立ち、そして生きること、そ
れを今日は聖書から学びたいのです。